

---

# 雑煮。その他もろもろ。

秀一

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雑煮。その他もろもろ。

### 【Nコード】

N5975E

### 【作者名】

秀一

### 【あらすじ】

昔書いたものを「いくつか」「一年振り」に更新しようとするも、終わらせきれないだらうなあいいやもう面倒だし全部ひっくり返す。一つの玉手箱ちつくにやっちゃえ、というノリで出来たバリユーセツト。以前に書いた、「大学生の暇つぶし」、「竜の裁き」も詰める予定。恋愛、戦国時代的ファンタジー、コメディ、BLなど、気分によって細々と更新できればいいなあ。現在は「アウトオブバウンズ」（ラブコメ）、「策謀の戦国」（歴史）などを更新中。

## アウトオブバウンス1（前書き）

このジャンルは「恋愛」です。

さらに分類すると「コメディ」です。

略して「ラブコメ」。

もう少し言つと「長編」にするつもりです。

んでもって、「見切り発車」です。

終着点はわかりません。

おおっと。

挨拶が忘れていました。

はじめまして。これから、よろしくお願いします。

## アウトオブバウンス1

一人暮らしをしていたお姉<sup>ねえ</sup>がうらやましかったのかもしれない。とりあえず、あの響きに憧れていたのは間違いない。勉強はうるさく言われなし、好きな食べ物食べ放題。友だちのお泊り会だって夜まで盛り上げれる。カレシ作ってウツハウハ。門限だって気にしない。そんな極上生活が始まるんだと思ってた。思ってたのに……。

「なんでだっ」

駅のプラットホームの中心で彩は不満を叫んだ。両の肩には大きなスポーツバッグ。中にはたくさんの衣類や生活用品が混在している。しかし、彩は負けない。バスケットボールで私立高校からスポーツ推薦の話があった運動神経は伊達ではないのだ。

「蹴ったのに。私立の特待生を蹴ってまで他県の公立を受験したのに。インターハイに出場したいとか理由をこじつけてまで受験勉強したのに。合格通知を貰って、これで一人暮らしだわーい万歳ひゃっほうだったのに、だったのに……。なんでだっ」

「あーもう。うざいうるさい恥ずかしい黙れこのクソ妹」

「だーって、お姉！ その話、おかしくない！？」

「重い。重いんだよ、こっちは。あんたみたいに力はないんだ」

悪態をついた沙耶<sup>さや</sup>はガラガラと大きな音を立てながらオシャレな旅行かばんを転がしていた。可愛い子犬の柄で、彩にとって、お気に入りの一品だ。大きめで、衣類を、圧縮袋を駆使して詰めているために、結構重くなっている。その上、そこから伸びたハンドルに花柄のポストンバッグが寄りかかっていた。両手で引きずっている姉の顔は、もう、必死だった。

だからなのかもしれない。エスカレーターに乗ると、一度、沙耶は大きな息を吐いた。

むう。こっちだって重いんですう。というより、お姉のはただの

運動不足なんじゃないの？ そんなんじゃ、おデブちゃんになっちゃいますよー。

「おデブちゃんがなんだって？」

しまった。小さな声だったのに聞こえていたらしい。

だが彩はシラを切る。

「え？ 何も言っていないよ。被害妄想じゃない？」

しかし、ミッションを成功させることはできなかった。なぜなら、彩がほんの少しだけ、そう、本当にちよつとだけ気にしている事柄を、沙耶が遠慮なくグサリとえぐったからだ。

「しつかり聞こえてんだよ、筋肉女」

「あんだって？」

「はんつ。運動ばっかしてつから、体格の割りにムネが貧相なのよ」

「……無駄な脂肪がない、スレンダーな身体ってことよ」

「貧乳」

ぐ、ぐぬう。この寄せて上げて女めえ。納得がいかん、いかんぞ。なんだブラウスのそのふくらみは。同じ血が流れているとは思えん。……いや、違う。パットだ。そうだ、ブラの性能なんだつ。

寄せる胸もない妹は反撃に出た。

「いいじゃない。ダイエツトができて、それに引越し代も少し浮いたでしょ？」

「ああ！？ おい、ちよつと彩、見てみ。んなもんする必要なんかないでしょうが」

「一昨日、体重計の上で唸ってたのは誰だったかなあ？」

「はんつ。そんな過去のこと。それに引き換え、現在進行形で乳ナシのあんた……。ああ、なんてかわいそうなの」

あー、くそつ。乳乳乳乳、しつこいつての。こっちは成長期なんだよ！

口喧嘩をしながらエスカレーターを降りて改札口を渡る二人。周囲の怪訝そうな顔。しかし、それによって生じる羞恥心よりも、罵倒に対する攻撃衝動の方が断然と強かった。

その上、沙耶は猛獣だった。

「大丈夫？ トップとアンダー、きちんと計れる？ 差がないからって、一緒にしちゃだめよ」

「うるさいうるさいうるさい。私は成長期なの！」

「そう。中学生だものね」

勝ち誇ったかのように笑みを浮かべた。

「高校生になりましたっ」

「はいはい。でもさ、引越し代が少し浮いたって言っても、なんとかパックで送れなかったものを私らが運んでいるだけでしょ。こんなことになるんなら、素直に全部配達するんだったわ」

改札口を出ても、地方にしては比較的広い駅なので、まだ出口までは距離があった。ゆえに、二人は一生懸命に荷物を運びつつも、高度な悪態を、まるで呼吸のように応酬させていた。

するりするりと回避しやがるとは、なんてずるいんだ。

「無駄に年を取ってないわね」

「あんたがしよばいだけ」

「ぐっ、この年増め」

「はいはい。社会人一年生の私が年増なら、社会人全員が年増よ」

「その通りじゃない」

「あのね、二十二つてのは若いの。お子ちゃまにはみんな大人に見えるかもしれないけどね」

「おばちゃん」

「ぐっ……。あんた、聞いてた、私の話？」

「うん。聞いてたよ、おばちゃん」

「どうやら耳も悪いようね」

「頭もって言いたいわけ？」

「あら、そんなこと言っていないわよ。それこそ被害妄想じゃない？」  
「そういうニュアンスだったのっ」

出口に辿り着き、床に敷かれたマットの上で自動的に機械が反応し、二人を認識した透明なガラスの自動ドアが開いた。ガラス越し

に射抜かれた光にも暖かみはあったが、直接に浴びる太陽光は遮断されたもの以上で、目を射るほどだった。彩は、肩にスポーツバッグがぶら下がっているにも関わらず、疲れた腕を上げて、手で顔に影を作った。

始まるんだ。

全身で感じた。雲ひとつない青空は自身を歓迎してくれている。

彩の胸に、自然と高揚が沸き起こった。当然、快く受諾した。すると不思議なもので、先ほどの口論は洗い流されたようにどうでもよくなってきた。むしろ、これからの方が重要であることに気がついたのだ。高校生活を前にした彼女は、先ほど話された内容への疑問を、触れたくはなかったのだが、必要なので姉にぶつけた。

「ってかさ。私、さっき、初めて知ったんだよね」

「そうなの？ もう知ってるんだと思ってた」

唐突だったのだが、きちんと沙耶は会話に乗ってきた。このあたり、恐らく、疑問に思うことなど、とうに承知だったのだろう。悪戯心が過ぎていた。

「誰が教えてくれるのよ、お姉の知り合いがルームメイトになるなんて」

「言ってなかったっけ？」

全く、お姉は。惚けても無駄なんだから。

「聞いてない。お母<sup>かあ</sup>たちに私の生活情報を流す人がどんな人なのか見たこともない」

「ついでに言うと、伝達役なんかも担ってるわよ。勉強しろ、とかね」

「はあ、最悪」

新幹線を降りる前、ちらりと沙耶が彩に今後のことを話したのだ。その途端にテンションが一気にダウン。最高から最悪へ。「なんだっ」という発言に繋がったというわけである。

「いいじゃない。家事もやってくれるのよ。一人暮らしでの家事って、ものすごく面倒なんだから」

「まあ、そうかもしれないけどさ」

「それにさ。大学の後輩なんだけど、顔が整ってるっていうの？  
なかなかイイ顔してんのよ。言い寄ってくる女をあしらう姿には貫  
禄があったね」

「はあ、モテる家政婦さんなんですネ。そら、素晴らしい美人様な  
ことでしょうね。光に群がる女どもを、……ん、女？」

「あの、付かぬ事をお聞きますが」

「何よ？」

「言い寄ってくる女ってことは、あの、そのお方、レズビアンさん  
ですか？」

「それだったら危ういかも。いや、偏見もないし、私が恋愛対象に  
なるかどうかは怪しいけど。ただ、その道には進みたくないかなあ  
というだけで。」

「違う違う。何言ってるの。なわきやないでしょ」

「そうだよな、うん。そんなわけないよね」

「そうそう。だって、男だもん」

「そっか。男なんだ。ビアンさんじゃなかったみたい。いやあ、良  
かった、良かった。」

「……って、男！？」

「ちよっとお姉、あんた、何考えてるんすか！」



## アウトオブバウンス1（後書き）

こんな感じの同居モノ。

気に入ってくれたらコレ幸いです。

一年前のモノですので、どんな予定かも忘れましたが、なんとか続けていきたいと思いまふ。

## 策謀の戦国1（前書き）

今度のジャンルは「歴史」。

いや、「ファンタジー」なのでしょうか。

とにかく、ネタ元は「戦国策」。

古い中国のお話がベースにあります。

それらを自分風にアレンジしたモノや、そのまま使ったりしたのが「策謀の戦国」ということになります。

楽しんでいただければうれしいです。

## 策謀の戦国 1

隣国から美姫が送られてきた。

王は初め、毎夜、姫の部屋へと足を進めた。私が大きく関係した政略結婚だったために、私にまで贈り物を届けるまでの熱心ぶりだった。その様子にはくそ笑んでいた。

「間者と疑われているのではあるまいか」

私が同郷だと知っている姫から相談されたのは、それから二ヶ月経った時のことだ。

姫は、この頃、極端に足が遠のいた王のことで危機感を覚えていた。無理もない。まだ十五にならないにもかかわらず、両国のことから嫁がされたのだ。それでいて、王からもたらされる情報が収集できないでいた。

「大丈夫でしょう。心配は無用ですよ」

「しかし」

「姫様がここにいらっしやるだけでも、意味は十分にあります。また、密使に伝えることが少なくなっただとしても、それはそれで一つの情報なのです。それよりも、うかつな発言はご注意ください」

「わかっておる。わかつてはおるのじゃが」

「他の女性の元にも行っているのでしょうか。疑いが蛇足になることもあります」

「わらわ以外の女？」

「そうです。男とはそういう生き物なのです。男の私が言うのですから、間違いありません」

「お前もそうなのか？」

「それはあなた様を感じてください」

同じような会話を何度も繰り返した。その内、私と姫とが深い関係を持っているのではないかという噂が流れた。姫に会いに行っているところを誰かに見られていたのだろが、それもこちらの計算

どおりだった。

「お前とあの娘が噂になっっているが？」

王に朝から呼び出された。仕事のことだったが、最後の言葉だけは違った。私は今まで随分貢献してきたために、信頼を得ていた。ために、口調はそれほどキツイものではなかった。むしろ、噂を楽しんでいるとも思えた。

「何の根拠もない、好き者の作り話です」

「火のないところに煙は立たないというが？」

「相談を受けていたのです。姫はどうやら、寂しがっておられるようです」

「ほう？ お前が解決すればよいではないか」

「ご冗談を」

王の機嫌は良かった。

その日の昼、王が来ることを姫に伝えた。

「今夜、王がここに来られます」

姫は綺麗に整った眉を寄せた。

「ご苦労じゃった。しかして、何をしたのじゃ？」

「姫様が寂しがっておられると」

「ふむ」

「それと。王がここに来られない理由もわかりました」

姫の顔が強張ったが、私は続けた。

「姫様は美しいと評判でした。なるほど、その髪の艶やかさ、そのつぶらな瞳の可愛いらしさ、その整った鼻梁、その腕のしなやかさ。なんと、狂おしいまでに魅力的な女性なのでしょうか」

「どうやら緊張は解けたようだ。変わりに、うっとりとした微笑を浮かべた。」

「しかし、王の趣味は少し変わっておられるようでして。唯一、鼻の形だけが気に入らないらしいのです。つまり、王と会う際は必ず鼻を覆うのです。そうすれば、あなたと王の距離は縮まるでしょう」  
一カ月経った。

王は私と競うつつもりなのか、毎日のように通っているらしい。私  
がたまに訪れると、姫は安心した表情を見せるようになっていた。  
姫から相談されることが無くなった。

今度は王から相談された。どうも、姫の様子がおかしいというの  
だ。

「何故か近寄ると鼻を覆うのだ。理由を聞いても笑うだけ。何か、  
聞いてはいないか？」

「鼻を覆う理由、でしょうか？」

「そうだ。お前なら、何か知っているであろう」

「知ってはいますが、しかし……」

私は戸惑いを作った。

「答えるんだ」

「ですが」

ついに王は声を荒げた。

「いいから答えろ！」

「……はい。その、姫が申されたのですが……、王の臭いがたまら  
ないのだとか」

「貴様あつ！」

「あつ。姫が、姫が申したのです」

「……なんとけしからぬ娘なのだ。すぐに捕らえて、あの鼻を切れ  
！」

仕事は終わった。その夜、私は第二の故郷へ密使を送った。

## 策謀の戦国1（後書き）

【完】

ということ、今回は短編です。

こんな種類のモノも載せていくアルヨという宣伝です。

反応次第で割合が変化していくかと思われますので、よろしく願  
いいたします。。。

## 策謀の戦国2（前書き）

今回も【歴史】です。

それから、短編です。

どうということもない、短編です。

さらに、今回も「戦国策」が元ネタです。

こうして故事を参考にしていくと、自然に

「真剣に一冊のみを読みこむ」ことになります。

それが、これほど楽しいとは思いませんでした。

## 策謀の戦国2

失ってしまった。

思うように伸びない髭を撫でつつ、王孫賈おうそんかは深くため息を吐いた。雲の大移動が行われている空から、時折、隙間から発せられる陽射しが、色あせた着物を照り付けている。荷を背負った大柄の馬を従い、たった一人、整備のあまりされていないと一目で分かる細い荒れた道を歩く背丈の小さな頼りない姿は、見るもの全ての同情心を誘った。

仕えるべき主人も、職も、生きがいすらも。

顔が歪んだ。

十五と若くして斉の国王に登用されたほどの頭は、粗暴であるとされて燕国に討たれた、斉国の閔王びんおうに対する周囲からの評価を思い起こした。

苛烈と表現されることが多かった。王位に就くなり、政治の要路にいた全く成果の出せない大臣らの首を一度に刎ね、地に広まりつつあった宗教の要人を殺したからだ。たった数年の出来事で、しかしそれが民衆と臣下の信頼を失わせた。確かに苛烈であったかもしれない。

だが、と常に近くで見してきた、今はどこにいるかもわからない主の思考を推理した。

必要なことであつたのだ。即位時、いやそれ以前から、補佐すべき、優秀であるべき大臣という職は、金でしか得られない職であつた。さらに、領主らは自身の利益しか考えない無理難題を口にし、実行していた。そうして曝け出される無能という醜態に、民衆が不満を感じて爆発を起こす可能性があつた。そして、それを有力な宗教が支配しようとしていた。乱、である。腐敗した人材では暴発を止めようがない。内紛による滅亡がありえたのだ。その上、諸外国は領土拡大による利潤を欲していた。だから、早急な対策が必要で、



わざわざ過激なことを我が主はやってのけ、王孫賈も自ら鬼と化し、手を血に染めたのだ。

結果、大臣が裏切った。そして王は行方不明、国は、さらに混迷を極めた。

急ぎすぎたのだろうか。

天を仰ぐも、雲が泳ぐばかりだった。

縄を持った右手が前方に引っ張られ、そちらに眼を向けると、並んで歩いていたはずの馬の尻が見えた。思わず苦笑した。

「そうか、お前はそう思うか」

重い歩を進めさせられる。なんとなく、後ろを振り返った。都にいてもすることは何もない。小さく呟き、顔を戻した。目指すは故郷。何も無い小さな村。いや、違う。母がいる。友がいる。それぞれの、数年前の姿が脳裏に浮かんた。元気でやっているのだろうか。もしかしたら、野盗化した敗残兵に襲われているのかもしれない。想像を巡らせると、急がねばならないと焦燥にかられる。だがしかし、より一層、足枷に働く重力がひどくなった気もした。

数日後、村が見えてきた。

記憶よりも小さいが、多少、堅固であった。相違に対し、しばらく記憶の修正をしていたところ、空の荷台を引いている見事な体躯の男が一人、村から出てきた。その姿が段々と大きくなっていくと、何を思ったのか、急に男は荷台を地面に置いてこちらに駆け寄ってきた。身構える。すると、嬉しそうに声をかけられた。

「久しぶりじゃないか！」

なんともまあ、間の抜けたことに、友人だった。

体が、それでも大きいが、昔と比べて細くなっていた。苦勞したのだろう。しかし、今にも抱きつかんばかりに頬を緩めている。

「生きてたのか。よかった、よかった。でも、村一番の、本当の出世頭がなぜここに？ 忙しいときなんじゃないのか？」

「終わったんだよ、何もかも」

「終わった？ 戦争が？」

「ああ、大きな戦争が、だ」

「そうか、それはよかった……」

良いはずはなかった。閔王側についた自分は救いの対象とはならない可能性が高い。改革の名の下に、多くの命を奪った。そうして作り上げてきたものを失った。これからは奪われるはずだ。新しき権力者に、全てを。

それに、これから小競り合い規模の戦が増えていく。閔王派の掃討、敗残兵の処理、新権力への渴望。搾取する側だったが、この村に来て、される側へとなる。王孫賈には道が見えないでいた。

「母はどうしている？」

「元気だよ。おまえさんの家にいるはずだ。まだ会ってないのか？」

「帰ってきたばかりだからな」

「それもそうか」

友人は笑い、頭を掻いた。

「まあ、とにかく、よかったよ。お前が無事で。これからも大変だろうが、生きているのなら、それが一番だ」

「そうだな」

王は、どうされていらっしやるのだろうか。聡明な方だ。健やかであれば良いのだが、相手は悪知恵の働く醜悪な奴らだ。居場所が発見され、襲撃に遭われていることもありえる。

現状はわからなかった。だが、結論は理解している。処刑だ。最も簡潔で、最も効果ある方法。彼には自身の未来が、魑魅魍魎ちみもろうりょうが出てきてもおかしくないほど暗いものに思えた。いや、いつそのこと、そうした化け物が出てきてくれたほうがまだ良いとも感じていた。髭を撫でる。どうしようもなく心許ない。しかしそこで、ふと、しなければならぬことを思い出した。

「ああ、そうだ。忘れていたよ」

「ん？ どうした？」

「挨拶がまだだった。何年振りだろうかもわからんが、久しぶりだ。元気だったか？」

友人が笑った。

「ああ、元気だよ。見てみる、背も高くなっただし、筋肉だってほら」友人は、自慢気に力こぶを作った。

友人と別れ、しばらく歩くと、家の門に、母が立っているのを確認した。

ここまでやってこれたのも、この生き生きとした母のおかげだった。包みこむ温かさがあり、突き放す厳しさがある。腕を組んでこちらを見つめる彼女は、烈婦そのものであった。

深くお辞儀をした。顔を上げると、母は、微笑んでいた。

「ただいま帰りました」

「随分久しぶりね。おまえ、向こうでいろいろと忙しかったんだろう。大きくなったように思えるわ。それに、いいのかい？ 帰ってきて」

「ええ、いいのです。もういいのです」

その答えに表情が一変、ふん、と鼻で笑われた。

戦の影響とは恐ろしい。母も、やつれていた。だが、瞳だけは相変わらず炎々としていた。

「どうせ、無様に負けたか何か失敗でもして、おめおめと帰ってきたでしょう。全く、だらしない」

驚いた。友人は戦争が終わったことすら知らなかったというのに。「なぜ……？」

それに、優しく出迎えてくれると思っていた。だが、それはなく、返ってきたのは、あからさまなため息。王からの信頼を得ていた王孫賈にとって、それは、自身の誇りを傷つけるには十分の行動だった。

「その顔を見ればわかります。本当に、だらしない子」

「王の行方がわからないのです！　これでは何もしようがありません！」

「おまえは本当に馬鹿だね！」

「どうしてですか！」

「私はおまえが帰ってくるまで、いつでも夕方はいつも村里の門に寄りかかって、遠くを向いていたもんだ。それなのにおまえときたら、王様がいないので帰ってきました、だって！？　笑わせんじゃないよ！」

体が硬直した。十五にして登用された頭で以てしても、王孫賈に何も言い返す術はなかった。神経という神経に稲妻が走ったからだ。

「おまえのような人間を、この家へ入れるわけにはいかないね。さあ、帰った帰った！」

言うなり、大きな音を立て、母は戸の向こう側へと去っていった。王孫賈は立ち尽くした。

愕然とし、何も考えられなかった。

「どうした」

心配して駆けつけてくれたのだろうか。出迎えてくれた友人がいた。

「怒鳴り声が聞こえたんだけど……」

うな垂れる。

どうしたもなにも……。

視線を上げる。友人の泥に塗れた足が、丈夫そうな脚が視野に入る。

これほどの力が俺にあれば……。

ため息を吐いた。

「いや、なんでも……」

と、不意に、頼り気な太い腕に眼を奪われた。途端、脳を駆け巡ったのはひらめき。

そうだ！

瞬間、これは天から頂いた使命であることを理解した。

「どうしたんだ？」

笑いがこみ上げる。

そうだ、そうだった。戦は続く。例え、大きな戦が終わっても、まだまだ小さな戦が残っている。例え、決戦と言われたものであっても、全てが終わらない限りは、本当に決戦であつたのかはわからない。まだ、可能性はある。

「頼みがある」

「家に泊まることか？」

「それもある。だが、もつと大きなことだ」

「大きなこと……？」

「ああ、大きなことだ」

スウツと、空気を肺に運んだ。口から出てきたのは熱気。いつの間にか、王孫賈の頬は緩んでいた。

「とある大臣が裏切つて、こんな状況になった。戦争の発端は、その大臣が燕の国の軍を手引きし、共に斉の国で暴れたことに始まる。今のままでは、この国がどうなるかわからん。そこで一つ、俺たちで方向を修正しないか？」

「……何をするつもりだ？」

「なあに、簡単なことさ」

そう、簡単なことだ。情報は掴んでいるが、裏は取れていない。裏切つたという確証はないのだ。しかし、そんなものではでっ上げればいい。難しいことではない。今頃は、多大な利益で私腹を肥やしていることだろうから、どこからでも埃は出てくる。実に容易なことだ。

「裏切り者を始末する」

## 策謀の戦国2（後書き）

この元ネタでは、成語が二つ生まれています。

母が子の帰りを待つせつない心を表す意味を持つ「いもん倚門の望」、  
味方に加勢する意味を持つ「さたん左袒」という二つです。

この短編では「左袒」は取り入れていませんが。

何はともあれ、母親の存在とは素晴らしいですね。

## アイトオブバウンズ2（前書き）

「アウト オブ バウンズ 2」

ラブコメです。

たぶん。そうなるかと。

ストックはもうなかったり。

もしかしたら「策謀」が今後続くかもです。

あ、それと。

今回、伏字を使う必要のあるものがアリマス。  
が、意図的にしてません。

気分が悪くなるかもしれません。

先に謝っておきます。すみません。

## アイトオブバウンス2

「……って、男!？」

先日、大学を卒業して地元就職した先輩がこちらへ来るということで、駅まで半強制的に彼女の迎えをさせられることになった斉藤弘樹は、その姿を探す途中、甲高い叫び声を耳にして驚いた。見てみると、大きなスポーツバッグを担いでいる背の高い少女が大きく口を開けて抗議していた。彼女が発言したようだった。

デカイ荷物を持ったまま、男って言葉はちよつと……。

その隣では、嫌なことに、弘樹の待ち合わせ相手である沙耶がおり、その上、こちらに手を振っていた。

まさか、あの子が？

未来を考えながら近づくと、再び、少女が大声を出した。

「頭おかしいんじゃないの!？　なんでうら若き乙女が男と二人暮らししなきゃなんないのよ。普通じゃない、普通じゃないよ。狂ってんじゃないの?」

「何言ってるの。大丈夫。あんたを襲う趣味なんてないはずだからね、と同意を求める形でこちらに視線が送られた。苦笑した。しかし正直なところ、頷き難いものがあつた。確かに、弘樹は別人種と思われる女子高生を襲うような趣味を持ち合わせてはない。ないのだが、男として、少しハートが傷ついた。まるで無能と言われているように受け止められたのだ。

声をかけ辛く感じていると、さらに、少女はスポーツバッグを地に置いて続けた。

「趣味じゃないって、どういうこと?　私、これでも結構モテたのよ?」

「だったとしても、たかが毛の生え出したばかりか、生え揃ったばかりの中学生でしょ」

沙耶さんもなんてことを駅前で言ってるんだ。



自身が言葉にしたわけではないが、弘樹は、自分の過去を脳から引き出して、恥ずかしくなった。そんな状態で、二人に踏み込むことは到底できないでいると、滝が上から下へ落ちるのと同義で口論はますますエスカレートしていった。

「うっさい。知るか、そんなこと！」

「当たり前。知ってたらお父さんとお母さんがあんたを竹上家から追い出してるわよ」

「お姉はどうなのよ」

「私は身持ちが固いから。知識としてあるだけよ。ねえ、知ってる？ 男って、自分の子どもなのか本当のトコロは全くわからない、哀れな生き物なのね」

「あー、はいはい。わかりました。気をつけますう」

「全く。パン子とかサセ子とかヤリマンとか、馬鹿にされないようにしなよ」

「当たり前でしょ！」

「それにレイプね。友だちにヤラレかけて逃げ出した人もいるくらい日常なことなんだから。きちんと考えなよ」

「わかってるっ」

こんなところで性教育とは。いや、心配してんだろうけどさ。いいのかなあ、これから住む場所でそんな目立ちかたして。

しかし弘樹は突っ込まない。ここに現在も住んでいる彼にとって、他人の振りをするのが最も有益な手段だからだ。そんなことを考え、遠くから眺めているうちに、どうやら戦いは収束に向かい始めているらしく、トーンが段々と低くなってきた。

「で、何でそんなこと考えてる人たちが男との生活を認めたのよ？」

「私の紹介だし、面接もしたからね」

「面接？」

「そう、面接」

面接、かあ……。

弘樹はその単語に、自然と、竹上家の両親の顔を想起させられた。

あれは、日常生活では到底体験できない、地震でいうところのマグニチュード八レベルの非常なものだった。どれだけ女子高生に興味ないかを言わされ、熱弁させられたのだ。そして、それ以上にやらなければならないことがあると告げさせられると、破顔一笑して、「まあ、これからは三年間、彩に悪い虫が寄り付かないようにあの子のことを頼むよ」と背中を叩かれ、大量の酒を飲まされたのだ。

次の日は頭が痛かったんだよなあ。あれは完全な二日酔いだっただな。

苦い経験を脳に収め、ようやく沈静化してきた両者に挨拶をしようと近づいたが、またもや、その行為を少女が遮った。

「面接してお許しつて。何、その人、ゲイなの？」

……おい。なんでそうなる。

結局立ち止まり、頭の中だけでツツコミをした。

弘樹は自身をゲイではないと予想していた。といっても、異性愛者かといえ、本当にそうなのかも疑問視していた。女性には情欲を感じた。しかし、男性には感じたことはない。これがイコール異性愛者といえると思えないというのは、とどのつまり、友情も愛情も明確な区別はなく、全てが同じ感情で、そこに性的余地が含まれるか否かというだけのように思えるのである。実際のところはよくわからないけれど。

そういう意味では、むしろ、僕はバイセクシャルに分類されるのかもなあ。

熟考していたが、すぐに現実へと引き戻された。

「たぶん、違う。色々あって、今はそんなことにかまってられないんだって」

「そんなことつて……」

「だから大丈夫」

「いや、あのさ。もしかしてさ、変態さんとかじゃないの？」

「……え、なんで？」

「ホラ、等身大のお人形さんにしか興味が無いとか、二次元の女の子しか受け付け無いとか、他の動物にしか興奮しないとか、いろいろあるじゃない。だから私のことをそんなこと扱いできたりするのよ」

「あー。それは考えてなかったわね」

「でしょ？」

「どうなんだろう？ その可能性は否定できないわね」

「お願いしますから否定してくださいよ」

つもりはなかったのだが、これ以上会話を進めさせると、ろくな事にはならないだろうと無意識に判断したのかもしれない。いつの間にか、弘樹は姉妹の過激なコミュニケーションに参加してしまっていた。

「僕はそんな変態さんではありませんから」

「あら、違うの？」

「違いますよ」

「酔いつぶれてた女の子たちを襲わないで、優しく介抱してたじゃない」

「それが普通なんです。それからの人間関係だってあるんですから」  
「ああ、そういえば。あのとき、逆に襲われてたよね。あれは楽しかったなあ」

「僕は辛かったです。相手はちつとも覚えてませんでしたし」

「えー。楽しいよ楽しい。見てる側は、だけど。でも、本当に覚えていないのかな？」

「どうでしょうか？ まあ、フリでも、忘れている素振りを見せるのでしたら、それに越したことはないかなあ、と」

「ちょ、ちよつと」

「ん？」

弘樹に声をかけたのは、だいたい百七十センチぐらいの背の高い少女だった。なるほど、モテたというのはあながち間違いいではないのかもしれない。あどけない彼女は、成長すれば沙耶のような美人

になると容易に想像できる容姿であつた。印象的なのは強い意志を持つ瞳。耐性がなければ、見つめられるとひとたまりもないだろう。「ああ、自己紹介がまだだったね。僕は斉藤弘樹。今日から一緒に住む人間だよ。よろしく」

「え、あ、はい。竹上彩です。よろしくお願いします」

「どうも。相手が可愛いお嬢さんでよかったよ」

挨拶をしたが、それでも心なしか戸惑っているように、弘樹には思えた。

可愛いってのがいけなかったのか？

疑問に感じていると、彩が続けた。それで疑問が解決した。

「あの、社会人の方だとはちつとも。ええつと、これは家庭にホームステイという形に？」

横で、ぷつ、と沙耶が吹き出した。が、勘違いするのも無理はなかった。弘樹は二十歳なのだが、初対面の人は必ず弘樹の年齢を二十五、六とよく見間違える。どうやら、友人が言うには、錆び付いたオーラが出ているからなのだそうです。彼には何がなんだかさっぱりだった。

「沙耶さん。あなたも間違えたでしょう」

「だってさ。社会人よ、ホームステイよ？ 妻帯じゃん。そら確かに大丈夫だわ」

「えつと、あの？」

ケラケラと笑っている姉に不安を感じたのか、こちらを見上げていた。

「いや、そんなにかしこまらなくてもいいよ」

「はあ」

「それと。僕はまだ二十歳なんだ。まあ、よく間違われるけど」

弘樹が言つと、彩は、何かを考えるように首を捻った。それを何度かするたびに、段々と力強い瞳に光が戻っていった。そして、再度、耳を突き破るほどの声を出した。

「はあ！？ やっぱ変態さんじゃん！」

僕、この子とやっていけんのかな。  
快晴の下で、弘樹の顔が曇った。

## アイトオブバウンス2（後書き）

性行為は容易にすべきものでアリマセン。

出産等の行為には「死亡率」という言葉が常について回ることを記憶しておいて欲しいです。それを言いたいがために書くこととしたのですが（8 / 21 現在）。。。。。難しいですね。

もっと更新頻度（現実逃避）を多くしたい今日この頃。

## 策謀の戦国3（前書き）

「策謀の戦国3」です。

歴史、短編。

キーワードはこんなところでしょうか。

ストック無くともネタはある。

ということ、恐らく、次もこんな感じの文章かもです。

### 策謀の戦国3

我慢がならなかった。

太陽が燦々と肌を照らしている頃にもかかわらず、酒の入ったひょうたんを片手に、城内をうろついていた。非難の目を向ける文官がちらほらといるが、睨みつけるとひ弱な男らは、さっと顔を逸らす。酔っていても愉快になれるはずがない。

馬鹿馬鹿しい。馬鹿馬鹿しい。馬鹿馬鹿しい！

近頃、我らが王に不死の薬、不死の法術と騙し、金品を得ようとする輩が多すぎる。そして、結局は秘術を伝えないが、その交渉は成功を収める。よい例を見せてもらったとして、礼を贈るのだ。

しかし、生あるものには必ず死があることは誰でも知っている。全く、不敬極まりないことだ。

「糞どもがつ！」

酒が空になっっていることを知ったので、床を罵った。

絶対的に足りなかった。足りない。足りないのだ。

俺の抱えている兵だって知っている。死地にあると思ひ込むからこそ、強力な勢を生み、強固な軍を破ることができるようになる。そうして他には無いほどの勝利を重ねてきた。また、赤子でも知っている。ゆえに、あの小さな存在は泣き喚き、乳を乞うのだ。そうしてすすくと成長していく。全ては、皆が死を死だと理解しているからだ。

これ以上は耐え難い。

あれだけの財を軍や政治に回せば、どれほどの利が生まれるのだろうか、と思わず考えてしまう。王の私利私欲が幅を利かせはじめたままでは、恐ろしいことが起こる。それくらいは容易に想像付く。どうしたものか。

思案中、ふらついている足が視界に入り、突然、フツと、愉快になった。



足元ばかり見ても仕方が無い。

なんとなく前を向いてみると、役人が恭しく何かを運んでいる様子が見える。厚みのある布を両手に乗せている。その上には、何か丸いものがあるようだ。面白半分に近づくとしかめっ面をされたが、構わずにからんだ。それほど酒を飲んではいけないはずだと疑問を反芻しながら。

「おい。その丸くて黒い小さな玉はなんだ？」

役人は、自身の顔と俺の顔を引き離しながら言った。

「將軍。珍しく昼間から。匂いますぞ」

「ふん。ただからよいのだ。いいから、それは何だ？」

「不死の丸薬ですよ。先ほど、献上されてきたのです」

「丸薬だと？」

「はい。霊薬のようです」

「では、食べられるのだな？」

「はい」

自然、顔がにやけてくる。

ふん、阿呆どもが。またやってくれたな。

「もう一度聞く。食べられるのだな？」

「はい。食べられますよ」

「では、頂くでしょう」

「えっ!？」

言い終わらない内に、さっとひったくり、黒い玉を飲み込んだ。

どうということもない味だった。目の前の、目を大きく開き、金魚のように口をパクパクさせている役人が滑稽で、俺は今日、初めて声を出して笑った。

「何事かっ!？」

心待ちにしていたのだろう。丸薬が通ってくる場所から大きな笑い声が聞こえたものだから、王が、血相を変えて飛び出してきた。薬一つで。

笑いが止まらない。

「しよ、將軍が丸薬を飲み込んでしまったのです」

「なんだとオ!? 貴様、本当かつ?」

「ええ、そのとおりです。臣が食べました」

「ぐぬう……。首だっ! 首を切り落としてしまえッ!」

「何をおっしゃいますか。それは筋違いというものです。臣が取次ぎ役に尋ねましたところ、取次ぎ役は、『食べられる』というものですから、臣は食べたのです。要するに、臣に罪は無く、罰せられるべきは取次ぎ役でございます」

「將軍、何を申されるか! 食べられるとはつまり、丸薬は食べ物であるということだ」

「そして! 客人が不死の薬を献ぜられ、臣がこれを食べ、王が臣をお殺しになれば、それは死の薬です。王は罪無き臣を罰したばかりか、人に欺かれたという情報を公示することになりますぞ」

「……鞭だ。鞭を用意しろ!」

結局、背中では全体的にみみず腫れし、ほとんどの表皮が剥けることになった。血や膿は際限なく流れ、衣を着るのもやつのことで、共に鞭を打たれた役人は死んだくらいだった。その上、階位も下げられた。

だが、それから不死への追求は影を潜めることとなった。健全な方向に歩もうとしているのだ。俺の勝利であろう。喜ぶべきことだ。決めた。

国に殉ずる。王ではない。国だ。俺を慕う部下や家族のいる国に殉ずるのだ。

その決意は、王でさえ、揺るがすことはできないものだ。

### 策謀の戦国3（後書き）

終了。

不死。

僕は嫌ですね。

愛した人と共に老い、朽ちること。

それはそれは愛しい時間だと思うのです。

まあ、ただの若造による言葉なのですけどね。

まずは人生を共にしてくれる人を探さないと。。。

## アウトオブバウンス3（前書き）

PC内から見つかったのでうpしてみる。

### アウトオブバウンス3

新しくできた友人である竹上彩は、武田直子に不安を感じさせていた。

規則正しいきちんとした高校生活は始まったばかりなので、二時間目の現在行われている数学の内容は、実に簡単すぎるものだった。ゆえに飽き飽きしていた直子は、素晴らしくどうでもいい内容なのに真面目に聞いてノートを取っている彩を、すごいなあ、とぼうつと眺めていた。

直子にとって、彩は悪い人間ではない。むしろ、気持ちの良い性格の友人である。明るく、素直で、面白くて会話も弾む。他県からきたというが、そこでも友だちはさぞ多かったと考えられる。それぐらい、彩は社交的なのだ。

四月になって少し経ったときのこと。ほとんどの学生が親と一緒に入学式に参加していたが、あいうえおで振り分けられた出席番号順で並んだために目の前にいた彩だけは、年の離れた、背の高い格好良い青年と共にいた。母親を連れた直子がなんだろうと考えているうちに式は終わり、「1 A」と分類された目新しい教室に通されると、当然のように前の席へと彩は座り、青年はその横に立った。これから一年間担任となる教師が自己紹介をした後、父兄に対しての小難しい話をしたが、それが終わるとクラスは一気に雑談と花が咲いた。

そのときだ。初めて会話をしたのは。きっかけは、彩が後ろを振り返り、はつきりとした明るい声で「おはよう。私は竹上彩。これから、よろしくね」と挨拶をしてきたことだった。モテるだろうな第一印象だ。それは今でも変わらない。

一方、直子の母は青年と二、三挨拶してから、知り合いのおしやべりを楽しみに動き、それを見た青年は担任の先生に近づいていた。気になってちらりちらりと覗いていると、彩もそうなのか、

親しげに担任と話す青年へと視線を何度も移していた。「お兄さん？」と聞くと、「まあ、そんなもん」と、珍しく歯切れが悪かったので、あのときの苦笑は今でも覚えている。本当に、いつもは快活な女の子なのだ。

でも、彩には大きな問題がある。容姿が端麗だということだ。直子は別に気にならないが、そのことを嫉妬する人は多いように思える。その上、男の子とも抵抗なく話をする。味方が多くなる性格である反面、強力な敵も作ってしまいそうなのだ。事実、まだ高校生活が始まったばかりにも関わらず、よく話題になる人物の一人となっている。

ため息を吐き、直子はシャープペンシルを上唇に乗せて、バランスを保りつつ、彩のことを考えた。

さらに、あの格好良い青年の存在があった。直子はバスケットボール部ではなく陸上部、それも入部したばかりなので実際はどうなのかを知らないが、なんと、青年が、毎日部活が終わる頃になると迎えに来ているらしいのだ。彩本人曰く、夜道は危ないからって心配性な兄が、と言うのだが、そうだとすると、相当なシスコンだ。少し危ない人なのかもしれない。

そういえば、と直子は思い出した。

お兄さんに関する事で、こんな噂もあったわけ。国立大学にいるのだけれど、そこでは、いつも違う女性と歩いているとかいう。噂だからあてにはならないけど、それほど、女癖が悪いつてことなのか。危ないのは、少しだけじゃなかったりして。実行力があるんだし。

そこまで想像を膨らませて、直子は顔を青ざめた。

ということは。まさか……、いや、彩に限ってそんなことはないと思うけど、もしかしたら、そのシスコンの青年と彩が、その、愛し合っていたりなんかして。ううん、そんなことはない、と、思うんだけど。あつ。そうか。彩にはお姉さんがいる。んで、お姉さんも同じ大学だったはず。ってことは、お兄さんのシスコンぶりが功

を奏して彩のお姉さんを追っかけることになって……、あれ？ えっ、ちよつと、それはドロッドロじゃないかな。危険な三角関係。うはーっ！

チヨークのアカペラ状態の静かな教室で、不意に、カシャンとノイズが響いた。一斉にクラスメートの顔が揃ってこちらを向いた。恥ずかしいことに、動揺した直子が、シャーペンシルを床に落としてしまったのだ。頬が赤くなるのを感じながら屈むもうとすると、その前に素早く彩が拾ってくれた。笑顔で渡されたのだが、先ほどの思考のこともあり、直子は、ぎこちなくお辞儀をしてしまった。

まあ、そんなことはないんだろうけど。このままじゃ不完全燃焼なんだよね。そう感じた直子は、真相を尋ねることを決意した。けれど、ちよつと聞きづらいなあ感じていたそのとき、なんとチャイムが鳴ってしまった。するとすぐに彩が後ろを笑顔で振り返った。「終わったねっ。次は英語だっけ？ 早く放課後にならないかなあ。そしたらバスケができるのに。まあ、部活中はボールに触れないんだけどさ」

ちよつ、心の準備がまだなんですけど！

「ん？ どうしたの？」

不思議そうに彩が覗いてきた。

「あ、いや、その……」

「ああ。シャーペン、あれは恥ずかしいよねえ」

嫌な汗が背中をだらだらと流れた。

「そう、だね」

歯切れの悪さに心配したようで、彩は瞳を潤ませて言った。

「あれ、どうしたの直子？ 調子、悪いの？」

「う、ううん。そうじゃないの。そうじゃないんだけどさ……」

「だけど？」

ダメだ。うん、このままじゃいけないんだ。

決心した直子は、おずおずと、彩に疑問点を尋ねた。

「えっと。あの、さ。えー、お兄さん、いるよね？」  
すると彩は決まり心地が悪そうに、

「ああうん」  
と頷いた。

「やっぱり……。あ、いや、そんなことはないよね。」

「でさ、えーっと。シスコン？」

「……はあ？」

「うわっ。怪訝って顔だ。これはマズイ。」

「や、ホラ！ 異常に一緒にいるじゃん！」  
彩の顔がさらに歪んだ。

「あちゃー。なんか悪化してる。」

「あー、なんのことをおっしゃっているんでしょうか？」

「だっ、だつてさ。血が繋がってるんでしょ？」

「そうだ、そうなんだ。血が繋がっている兄妹なんだから、そんなことはないよね？」

「ああ、そうか。そういうことね」

「うーん、としばらく唸った後、近親相姦してるかもしれない女の子は、うん、と思い切った表情で言った。

「凄く言いづらいんだけどね……。血はね、繋がってないんだよ。いろいろあつてさ、義理の兄妹ってヤツ？」

「……いやいやいや、ちよつとそれは予想外。血は繋がってないっていったよね。だから義理？ 義理の兄妹？ それであんな関係？

「ややや、それは危ないよ。」

「……あれ、お姉さんは？」

「あ、お姉とは血が繋がってる」

「ちよつと！ 聞きました、奥さん！？ 義理のお兄さんが実のお姉さんを大学まで追いかけて、彩を溺愛ですって。……あつ、そうか。それでお姉さんとお義兄さんが結婚して、だから彩のお義兄さんとなったってことか。なあるほど。それは納得。」

「へえへえ。ってことは、今、三人暮らし？ 入学式のおときにはお



義兄さんが一緒だったよね。確か、寮じゃなかったはずだよね？」

彩は他県から来たと言っていたよね。ってことは、この近くの国立大に通っていたお姉さんと、お姉さんと結婚したお義兄さんが一緒に住んでいて、そこに彩が居座るようになったってことかな。あーん、新婚さんのお邪魔虫じゃん。

「えーっと。いや、その、誰にも言つて欲しくないんだけど……。実はさ、二人暮らしなんだ。お姉が地元企業に就職したから」

「うおい！ 新婚さんのいやんな家庭に猫一匹乱入ですか！？ でもでも血の繋がっていない兄妹は二人暮らし。妻は外で仕事をして、その間は猫が可愛がられている。こういうことだよ、だよ。ってことはあれだ、昼ドラだ。昼ドラの女王だつ。」

「そ、そんなこと誰にも言えませんかよ先生！」

彩が満面の笑みを浮かべた。

「よかったあ。話したのが直子でよかったよ。ちよつと、複雑でさあ。さすがに大声で言えないじゃん、こういうのって」

「うんうんうん。私以外の人には絶対に言わないほうがいいと思うよ」

「だよねえ。もう、誰にも言わないようにするよ」

「そうだね、うん。それがいいよ。私も絶対にしゃべらないから」

「ありがとー。直子って、イイ人だね」

「あはははは」

いやはや。美人ってのは恐ろしい。こんな人生が待っているとはモテるってことは取り合いになるってことで、その戦いは当然のように、泥沼化するんだ。お義兄さんが中心で、そこに自分に自信のある彩のお姉さんと彩が、絶対にモノにすると、攻防を繰り広げる。美人ってのは、本当に恐ろしい生き物なんだなあ。

直子は自身と、波乱に満ちているであろう友人とを比較して思った。

「私、普通の顔でよかったよ」

「いきなりどうしたの？」

「んー。人生について一つ、大人になったかなって」

「何言ってるの？」

「いやあ。先生には及びませんよって」

「ていうかさ、先生ってなによ」

「それはもちろん人生の」

と言ったところで、ハッと、気が付いた。

「そうか、そうだね。それは放課後が楽しみだね」

渋い顔で頷いていると、何を言っているんだコイツは、という表情で彩が見ていた。

「えっと、さ。何か、勘違いしてない？」

「いやいや。わかってます、わかっておりますとも」

「本当に？」

「もちろん。ほら、本物の先生が来たよ。チャイムはまだなのに、やる気があるねっ」

「なあんか、違和感があるんだよなあ」

しかし、真面目な彩は準備をし始めた。

直子は微笑み、私は影ながら見守るからね、と心の中で呟いた。

### アウトオブバウンズ3（後書き）

ポケモンでコケた。

対象年齢を間違えたらしい。

公開したことに後悔している。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5975e/>

---

雑煮。その他もろもろ。

2010年10月9日21時28分発行